



小児の外来診療は子育て支援そのものである

横田小児科医院（小田原市） 横田俊一郎



県西部小田原市で開業して 25 年が過ぎました。開業当時年間約 2000 あった出生数は最近では 1250 程度まで減少しています。ヒブワクチンと肺炎球菌ワクチンの導入によって、ドキドキするような重症感染症にはめったに会わなくなりました。一方で心理的な問題で受診するお子さんは増え、不登校や発達障害への対応で右往左往する日々が続いています。虐待に関する連絡を保健センターや児童相談所から受けることも増えてきました。

今、小児医療・保健に携わる人たちがすべきことは、自ずと見えてきていると思います。軽症疾患や身体の小さな心配で受診する大部分の患者さんと保護者に対して、私たちは何を提供しているのでしょうか。抗菌薬を含めた薬の多くは、日常の感染症で必要がないことが論じられていて、薬はますます使いにくくなっています。私たちの与えるべきものは検査や処方箋ではなく、何よりも保護者の心配に寄り添い、丁寧な病気の説明とホームケアの方法をアドバイスすることになってきています。医療というより、まさに子育て支援を外来で行っていると考えべきではないでしょうか。

重大な病気を見逃さないためだけに小児科の外来診療をしているのではないと考えると、診療への姿勢も自ずと変わってきます。保護者が遠慮なく心配の相談をし、納得して帰ることができるような外来診療を行うことが、今の小児科医には求められているように思います。そのためには、受診する家族の背景にあるものに心を配り、不安の原因を考えられるような診療をしなくてはなりません。受診しやすい環境を整えること、相談しやすい雰囲気を作ること、納得できる説明をできることなどが不可欠です。また、不安のある家族には、子育て支援を行うさまざまな事業所がチームを組んで対応しなければなりません。連携は必要とわかっていてもなかなか難しいところがあります。整備が進み始めた子育て世代包括支援センターの活動にも期待したいと思っています。

